

国語試験問題訂正

12
ページ

11
スルドく

↓ 答えなくてよい。

二〇二五（令和七）年度

国

語

(60分 120点)

注 意

- 一 試験開始のチャイムが鳴るまで、表紙を開いてはいけません。
- 二 試験開始のチャイムが鳴ったら、まず解答用紙の決められた所に受験番号を書き、問題のページ数をたしかめてから始めなさい。
- 三 問題は二十五ページまであります。ページの不足や乱れがあったら、だまって手をあげなさい。
- 四 印刷のはっきりしていない所があったら、だまって手をあげなさい。
- 五 試験終了のチャイムが鳴ったら、すぐ鉛筆を置き、解答用紙を、表を上にして問題用紙の上に置きなさい。

受 験 番 号

(問題は次のページから始まります。)

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(問題の都合上、一部表記を改めたところがあります)

中学二年生の斗羽風汰は、学校のプログラムで、五日間「エンジェル保育園」に職場体験に行くことになった。職場体験に行く前、風汰は捨て犬(チビ)を偶然見つけ、自分の住む団地の駐輪場にある小屋でこっそり世話をしていた。

保育園の職場体験が始まると、風汰は四歳児クラス・きりん組の担当となり、担任の林田と一緒に子どもたちと関わることになる。その中で風汰は周囲の子と雰囲気の違いしおん君のことが気にかかる。風汰は職場体験四日目(金曜日)の午後十時頃、しおん君が一人でマンシヨンの前にいるのを、まーくんセンパイ(同じ団地に住む高校生)と一緒に目撃してしまう。

以下の本文は、その翌日(職場体験のない土曜日)に、元気がなくなったチビを風汰が動物病院につれていった場面からはじまる。

「低血糖症(血液中の糖分が少ない状態)だね」

チビを診察した不精髭を生やした若い獣医は、そう言って難しい顔をした。

「子犬はゾウキが未発達だから、栄養がうまく取れないと低血糖症を起こしちゃうことがあるんだよ。エサはどれくらいの間隔であげてたの?」

「このくらいかな」

両手を近づけたり離したりしている風汰を見て、獣医はくつと笑った。

「ごめん、距離じゃなくて、時間。時間の間隔」

「あ、そっちっすか。えっと、朝学校に行く前と、夕方帰ってきてすぐ」

「それは時間空きすぎだな」

「今日はもつと……。オレ寝ほうしちゃって、駐輪場へ行ったのは」

「駐輪場？ きみんちで飼ってるんじゃないの？」

「オレが拾って。飼ってくれる人探してんですけど、まだ見つからなくて」

獣医はそうかーと息をつきながら、子犬を抱き上げた。

「それならうちで預かろうか。里親もそのほうが見つけやすいだろうし」

獣医は待合室に出ると、窓に立てかけてあるボードを裏返した。

里親募集の文字の下に、犬の写真が五枚貼つてある。子犬は一枚で、セイケンが四枚。写真の下になにか書いてある。

「六歳メス 体重・八キロ 散歩・朝夕二回（一回三十分程度）ひとなつくく、おとなしい性格です」

隣の犬のところには、「ケイドの椎間板ヘルニア（³病気の^{名前}）。立ち上がるときに時間がかかることがあります」と、病気について

まで書いてある。

風汰がそれを見ていると、獣医はチビを抱いたまま待合室のソファに腰かけた。

「里親にはできるだけ正確に、その犬のことを知ってもらって引き取ってもらうんだ。引き取ったあとでこんなはずじゃなかったっていうのは、お互いに幸せじゃないからね」

「病気の犬でも飼ってくれる人っているんですか」

「なかなか難しいけど、一〇〇パーセント無理っていうわけじゃない。これまでも引き取ってくれた人はいるよ。重症な子になると難しいけどね。でもこの子ならすぐに元気になるし、飼い主も見つかると思うよ」

「ホントに？」

「ああ、これと同じものを、表のペットショップにも置かせてもらってるんだ」

「ペットショップに？」

①「そうだよ、犬を捨てる人間もいるけど、守ろうとする人間も少なくないんだよ。きみもそうだろう」
オレは……。

風汰は獣医の膝ひざの上にいる子犬に視線を落とした。

パンツのポケットに手を入れて、風汰はバス通りを歩いた。ホッとしたような、さみしいような、でもやつぱり肩かたの二4がおりたような、そんな気持ちぐるぐるしている。

あそこならきつと、チビを飼ってくれる人を見つけてくれる。チビは幸せになれる。

そのことに一ミリだって不安はないし、疑ってもしない。そもそもあの小屋には、もう置いてもらえないし……。

——守ろうとする人間も少なくないんだよ。きみもそうだろう。

違う。そんなじゃない。守るなんて考えてたわけじゃない。ただ段ボールの中に置いていけなかっただけだ。できもしないのに、犬のことなんてなんにもわかってないのに、自分で飼うことだってできもしないのに、無責任につれてきただけだ。それで病気にまでして。

結局、チビのためにしてやれたことなんて、なんにもなかった。

家もとに戻ると、大きめのマグカップに牛乳をとぼとぼそそいで、喉のどに流しこんだ。

——おひげだ！

——おひげ、おひげ。

ふと、おやつ時間に互いの顔を指さして笑い合う、きりん組の子どもたちを思い出した。牛乳ひとつで大騒おおさわぎだ。しおん君も、鼻の下に白いあとをつけて笑っていた。

口元をぬぐって、息をついた。

あいつのことだって……。

マンションの前にいたしおん君の背中が脳裏をかすめる。小さなからだを棘だらけにして、誰も寄せつけない。手を伸ばされることも声をかけられることも、近づくこともぜんぶ拒んでいた。

昨日のバンから、何度も何度も同じことを考えていた。

あれ、本当にあいつだったのかな……。

「ふうたくん」と言いながら、ジャージをそつと握って、まぶしそうに風汰を見上げて笑うしおん君を思い出して、息が浅くなる。

小さくかぶりを振って、白くあとのついたグラスを流しに置いた。

どうでもいいじゃん。オレにはカンケーねーし。

たまたま職場体験で五日間、保育園に行っただけ。それもあと一日、月曜で終わりだ。子どもなんてすぐ泣くし、調子にのってふざけるし、うるさくて、面倒なだけで……。

風汰は頭をガシガシこすって、ふつ、と前髪に息を吹きかけた。

「メシ食おう」

腹がへってるからこんなことはつまり考えちゃうんだ。

② いふくろ
いつだったか誰かが、胃袋と心は比例するんだって言ってたことを思い出して冷蔵庫を開けた。

オムレツとサラダ、食パン三枚を腹におさめると、本当に気持ちが悪く落ち着いた。チビのことも、なんかやや言っても、あの獣医につなげたのは自分のお手柄だったような気がするしてきた。

ソファに横になって、ローテーブルの上にあるテレビのリモコンを押すと、液晶画面に通販番組が映し出された。チャンネルをかえる。おもしろそうなんやってないな、と、もう一度リモコンのボタンを押したところで手が止まった。

司会をしているタレントがまじめな顔でうなずいている。その右端に出ているテロップ（字幕）に心ぞうがどくんとした。

『虐待の疑いで母親逮捕』

相次ぐ虐待死はなぜ防げない』

思わず起き上がった。

コメンテーター（解説をする人）「たちが難しい顔をしてなにかしゃべっている。

どくどくどく、鼓動こどうが早くなる。

警察にレンコウされる若い母親の映像が映されている横に、笑顔えがわの女の子の写真が小さく映っている。その笑顔がしおん君と重なった。

気がつくと家を飛び出していた。

むんとした空気に包まれる。団地の階段を駆け下りて、緑ばかりが目立つ人気のない公園を突っ切きってロジ7に出ると、アスファルトから重たい風が立ち上ってくる。このあたりは住宅街で、目じるしになるような建物や店がない。似たような家の間に、古い大きな家やアパートがぼつんぼつんと立ち並んでいるだけでわかりにくい。しかも夜と昼ではインシヨウ8が違ちがう。

どこだったっけ、あいつんち……。

手の甲うでであごの下の汗あせをぬぐい、県道のほうへ駆け出した。

住宅街をぐるぐる回っているより、少し遠回りになっても昨日と同じルートを行くほうが確実だ。たしかコンビニの少し手前の道に入って、数分のところに……。

と、背中から大きなクラクションが鳴った。

「うわっ」

ブロック塀べいにからだを寄せると、風汰のすぐ脇わきを引ひつ越こし屋やのトラックがすり抜けていった。

立ち止まったらたん、驚おどろくほど

A

が上あがっていることに気づいた。肩を上下させながら膝に手をあてると、地面にぼた

ぼたと汗が落ちて、アスファルトに黒い染しみをつけた。

真夏のような日差しが、容赦なく照りつけて首の後ろがじりじりと熱くなる。大きく息をはいて、顔を上げた。

「あ」

トラックが曲がった先に、四階建ての灰色がかった建物が見えた。

マンションの前まで行くと、風汰はしばらくエントランス（入口）の周りをうろうろして、入口の前にある階段に腰を下ろした。座ったまま振り返ると、昼間なのにエントランスの電気がつけっぱなしになっている。団地でもときどき朝になっても廊下や階段に電気がついていたりするときは、タイマーなのか明るさセンサーなのかはわからないけれど、ときどきゴサドウを起こすのだ。それでも、学校から帰ってくるときまでつけっぱなしになっていることはない。誰かが、ちゃんと手動で電気を消す。団地には、お世話な人が多いから。

小学生の頃、六時を過ぎて公園であそんでいると、団地のじいさんやばあさんが誰かしら出てきて、早く帰れと言われた。ここには、そういうじいさんもばあさんもないのかな。

「風汰？」

ふいに名前を呼ばれて顔を上げると、自転車が止まっていた。

「なにやってんの」

「まーくんセンパイ」

思わず立ち上がると、まーくんセンパイは、まぶしそうに目を細めながら、風汰とマンションを交互に見て笑った。

「風汰って、¹⁰アンガイおせっかいだよね」

「じーさんたちと同じにすんなよお」

「じーさん？ え、なんで？」

「べつに」

風汰がすねたように口を尖らせると、まーくんセンパイは、くくつと笑った。

「おまえ、昨日の子のこと気になって来たんだろ」

「……まーくんセンパイこそなんでここにいの？」

「オレはバイトの帰り。で、なんでそんなとこに座ってんの、気になんならその子んち行ってみればいいじゃん」

「だって」

「ん？」

「部屋番号、知らないし」

「マジ？」

「マジ」

マジかあーとうめいて、まーくんセンパイは自転車のハンドルに顔を埋めた。

「べつに部屋番号わかんなくたっていいし。ここで待ってれば、そのうち出てくるじゃん」

そう言つて、風汰がどかっとマンションの階段に腰かけると、まーくんセンパイは顔を上げた。

「なら聞けばいいじゃね？ 保育園のセンサーならあの子んちの番号知ってんじゃない」

「あつ」

のれよ、とあごを動かすまーくんセンパイのうしろに回り、自転車のハブステップ（足を乗せるところ）に足をのせた。「いくぞ」の声と

同時に、自転車が動き出すと、ぬるい風が風汰のシャツを大きく膨らませた。

エンジェル保育園の前でまーくんセンパイが自転車を止めると、風汰はびよんと飛び降りた。午後三時。いつもならお昼寝が終

わって、騒がしくなる時間だけれど、今日はやたらと静かだ。門の外から目を凝らしていると、「休みなんじゃね？」と、まーくんセンパイは自転車に座ったまま言った。

「だってリンダ、今日は当番だって言ってたし」

もう一度中をのぞきこんだとき、ふいに耳を引っぱられた。「いたたたっ！」と、風汰が声を上げると、背後から、きやはは、あははとキー（声の調子）の高い笑い声がした。

「わっー リンダ」

「ハヤシダだつて言つてんでしようがっ」

林田が風汰の耳を引っぱつてにらんでる。そのうしろで三歳児クラスのチビ一人と五歳児クラスの女の子二人が声を上げて笑つてゐる。

「なんで外にいんの」

耳を押さえながら言うと、林田は胸の前で腕うでを組んだ。

「お散歩。土曜日はいろいろイレギュラー（いつもと違う状態）なのよ。つていうか、きみこそなんでいるの？ 今日休みでしょ」

「ふーたくん、またおこられた」

「おこられたー」

「なに？ 風汰って、いつも怒おこられてんの？」

おかしそうにはやし立てる子どもたちの前にしゃがんで、まーくんセンパイは楽しそうに話しかける。

「そーだよ」

「いつもおこられてるよね」

「うん、おこられてる」

「うそつけ、そんな怒られてなんてねーよ」

子どもたちに言い返している風汰を見て、林田はぷつと笑いながら門を開け、玄関げんかんの横についているインターホンを鳴らした。

「ただいま戻りました」

『いま開けまーす』の声と同時に、音を立てて鍵かぎが開いた。子どもたちを中に入れると林田が振り返った。

「入んなよ。用があるんでしょ。そっちのきみもどうぞ」

まーくんセンパイはにっと笑って、頭を左右に振った。

「オレはここで。風汰、じゃあな」

「え、まーくんセンパイ帰んの」

「帰る。オレのおせっかいは風汰に対してだけだから。こつから先は関係ねーもん」

風汰が懺然とした表情を浮かべると、まーくんセンパイは「がんばれよ」と右手をひらひらした。

「おもしろい子ね。で、どうしたの？」

林田はスニーカーを靴箱くつぽうに戻しながら、風汰を見た。

「あ、そうだ。オレ住所を、しおん君の住所を教えてもらいに」

「それはダメ」

即答そくとうかよ。理由りゆうくらいは聞かれるかもしれない、とは思ったけど、ダメってなんだよダメって。

「なんでっ」

「住所は園児の個人情報だからね」

コジンジヨウホウ？

「オレ、そんな難しいこと言ってるわけじゃ」

風汰が言うと、林田はふっと笑った。

「園児の住所とか電話番号とか家族構成とか、そういうことは言っちゃいけないって決まりがあるの。③あたしたちの
の」

「なんで？」

「なんでって、悪いことに使われたら困るでしょ」

な

「オレ、悪いことなんてしないけど」

「そういうことじゃないの」

「じゃー、どーゆーこと？」

「……」

林田はこめかみに手をあてて、ため息をついた。

「オレ、昨日の夜、しおん君を見たんだ」

「夜？」

「一人で、マンションの前にいた」

「それって何時頃？」

「十時頃。ヘンじゃん、そんな時間に。だから」

「来てるよ、しおん君」

林田は、おいでと風汰の腕をつかんでテラスまで出ると、園庭を指さした。

ウサギ小屋の前に、小さな背中があった。しゃがみこんで、小屋をのぞいている。さらさらの髪^{かみ}に太陽の日差しがあたって、天使のような輪を作っている。

きりん組のあいりちゃんが「しおんくん」と駆けよると、小さな背中が振り返った。

笑っている。いつもと同じように、しおん君は少しはにかなだ笑顔をあいりちゃんに向けて、なにかうなずいている。

「こっちに來て」

林田は、風汰を事務室で待たせて足早にホールのほうへ向かい、すぐに戻ってきた。

「少しなら大丈夫^{だいじょうぶ}。土田さんもいるから」

土曜は登園する園児が少ない。その分、保育士の数もぎりぎりにおさえられている。今日は林田と一歳児クラスを担当している

保育士、それにパートの土田さんの三人だ。

風汰はガラス戸の向こうに目をやった。

「斗羽君が気になることってなに？」

あらためて聞かれると、どう言えいいのか戸惑う。

言葉にしたなら、それが現実になってしまいう気がして怖い。口にしたくない。しおん君はいまここにいる。いつも通り笑っている。

④ 大丈夫なんだ。きつときつと、大丈夫だ。

「斗羽君、心配してるんじゃない？」

「えっ？」

「虐待、とか」

林田の言葉に、息が詰まった。胸がきゅつと締めつけられる。テレビや新聞では毎日のように見聞きしている。もうセンサーシヨナルな（驚くような）言葉でもなんでもない。なのに、目の前にいる林田の口からこぼれた言葉は、まるで違って聞こえた。

息苦しいほど重く、ざらりとした感触と冷たさをもって、スルドく突きつけてくる。

風汰は唇をかみ、大きく息を吸った。

「わかんない」

「うん」

「だけど、やっぱヘンだ」

うん、うん、と林田はうなずいた。

「……オレわかんねーけど、虐待とかそういうの。そうじゃなくて、そういうんじゃない。でも、大事にされてんのかなって、ちゃんとあいつ」

園庭から、子どもの笑い声が響く。ガラス戸の向こうに視線を向けると、保育士がホースで散水しているところへ、泥んこになった子どもたちがキャーキャー言いながら近づき、保育士がその子たちにホースを向けると、声を上げて園庭を駆け回る。しおん君はニコニコしながら、その様子を園庭の隅で見ている。

⑤「あそばせてあげたいんだよね、しおん君にもあやつて、思いっきり泥んこになって」

林田がぼそりとつぶやいた。

そういえば、しおん君が泥んこあそびをする姿を一度も見えていない。白いシャツに汚れひとつつけないで、いつもきれいで……。

「泥んこあそびつて、子どものバロメーター（目安）だと思うの」

「バロメーター？」

「泥んこになるつて、最初勇氣いるでしょ」

「うん」

「心とからだ解放されないと、泥んこあそびつてできないから。しおん君は絶対に土にふれようとしな。お母さんが汚れることを嫌うから。園で服を貸してあげるつて言つてもダメ。お母さんに嫌われることは、したくないんだよね」

「……」

「でも、させるよ。泥んこになってあそべるようにする。いつか、絶対」

廊下から足音がして、パートの土田さんがびーびー泣いている小さな女の子の手を引いて顔を出した。

「きなちゃん転んで、おでこをぶつけて」

「あー、イタかったね¹²」と、林田はその子を抱き上げた。

「帰る」と、風汰が事務室のドアに手をかけると、「月曜日ね」と林田の声がした。

「ちゃんと来るんだよ」

園の周りを二周して、風汰は門の外側から中をのぞきこんだ。

午前七時十五分。

って、なんでオレ、こんなに早くに来てんだよ。

キーツ！とけたたましいブレーキ音を響かせて、門の横にママチャリが止まった。ワンピースにミュール（サンダル）をつつかけた母親が「早く早く」と、後ろのチャイルドシートから男の子を下ろし、前カゴに入っている大きな袋（ふくろ）を抱えて中へ入っていった。そのうしろから、やつぱり大きな袋を持ったお母さんが、ベビーカーごと門の中に入っていく。

肩をとんと叩たたかれて振り返ると、右の頬ほおに指先があたった。

「ひつかかつた」

先生は指をぴゅんと引っこめてクスクス笑う。

「おはよ。どうしたの？　まだ七時だよ」

「あ、まあ」

風汰があいまいに首をかしげると、ポン先生（五歳児クラスの担任）は「行こ」と、風汰の背中を押して門をくぐった。

「今日で職場体験、終わりだね。さみしくなるなあ」

思つてもみなかったひと言に風汰がぽかんと口を開けると、ポン先生はくすりと笑つた。

七時三十分を過ぎると急に騒がしくなった。なにをすればいいのかわからず、事務室でうろうろしていると、林田が呼びに来

た。

「斗羽君、ホールお願い」

ホールには昼寝の時間でもないのに布団が出ていた。半分に折った状態で、布団の端についているマークが見えるように少しずつずらして重ねてある。

「なにこれ」

「月曜日はシートかけとか、着替えの補充があるから朝は大忙し。できるだけお母さんたちが素早くジューンビできるように、こ
うやって布団押入れから出しておくだけだね」

と、林田は布団の上を飛びまわる子どもを「向こうであそぼうね」と抱き上げて、崩れた布団を並べ直した。

「シートはお母さんたちがかけるから手伝わなくていいよ。でもすぐ布団が崩れてマークが見えなくなるでしょ、子どもたちも入ってくるから、フォロー（手助）してほしいの」

「オッケーっす。布団直したり、子どもを追っ払えばいいってことっすね」

「まあそうだね」と林田は苦笑した。

ホールの中は、「おはようございます」の声が飛び交い、入れ替わり立ち替わり、大きな袋を抱えた親子がやってくる。子どもたちは布団にシートをかけている母親のそばでごろごろしたり、持ってきたタオルケットを首に巻きつけたりして、母親に、「やめなさい」「じゃましないの」と叱られている。それでも子どもたちは母親にまわりついていて、おかしくらい、どの子もだ。

みんな大好きなんだ、お母さんのことが。

ホールを駆け回る三歳児を捕獲して、ばんだ組につれていこうとしていた風汰はその子を床に下ろして、崩れた布団を重ね直した。

「おはようございます」

林田の声に、今度は誰だ、とホールの入口を振り返った瞬間、どくんと心ぞうが鳴った。

しおん君。

たたたたたたつ！ しおん君は駆けてくると、くんとあごを上げて風汰を見た。

「おはよお」

「オ、オッス」

風汰が言うと、しおん君はいつものように少しはにかんだように笑い、かばんを下げたまま、並べである布団のところへ走っていく。そのうしろから、しおん君のお母さんが表情を動かすこともなく入ってきた。

「おかあさん、しおんのおふとんあった」

しおん君が重ねてある布団の上につて、ひまわりマークの布団を引っぱる。

ひまわりは、しおん君のマークだ。

お母さんは表情を変えずにしおん君のところまで行くと、びしゃつと足を叩いた。

「あつ」

風汰は思わず声をもらした。

⑥「布団の上につていいの？ いけないの？」

しおん君はびくつと硬直して、あわてて布団から下りる。「これ」と、ひまわりマークの布団を指さすしおん君を一度見て、お母さんは周りの布団を整えはじめた。

「¹⁴どうしていつもヨケイなことばかり」

「お母さん大丈夫ですよ」

林田が足早にやってきて、お母さんの隣にしゃがんだ。

「マークが見えていればわかりますから」

「¹⁵こういうことはきちんとしないと。あの子はなにをやらせてもいいカゲンなんです。面倒なことばかりするんです」

形のいい口元をゆがめるお母さんに、林田はゆっくり

D

を飲みこむようにして笑った。

「お母さん。しおん君はいい子です。すごくいい子です。大丈夫ですよ」

お母さんは立ち上がると、黙って布団を広げた。しおん君がカバンからシーツを取り出して、「はい」と手を伸ばす。あごを上げてお母さんを見上げる。笑顔だ。

そんなしおん君から、お母さんは視線をそらして手早くシーツをかけると、なにも言わず、ホールを出ていった。

「おかあさん、いつてらっしゃい」

あとを追いかけて笑顔で手を振っている。そんなしおん君の小さくて薄い肩に、林田がそっと両手をあてた。

風汰は、しおん君と、しおん君のお母さんの背中を見つめた。

（振り返ってくれよ。頼むから。一度、一瞬でいいから、しおん君に手を振ってやってよ）

お母さんの姿が廊下の向こうに消える。でもしおん君はじっと、廊下を見つめている。

なんだよ、なんでだよ……。

こんなの、だめだ。

風汰は、しおん君の手を握って廊下を走った。はだしのまま玄関から飛び出すと、ヒール（かかとの）を鳴らして歩いていく背中に向かって叫んだ。

「いつてらっしゃーい！　いつてらっしゃーい！　しおん君のお母さん！」

お母さんが立ち止まる。

しおん君が、つないでいる風汰の手をぎゅっと握った。

「おかーあさん」

しおん君が大きな声で叫んだ。

その瞬間、お母さんはびくつとしたように振り返った。

「おかーあさーん、いつてらっしゃーい」

ぐっと伸び上がり、しおん君は大きく何度も手を振った。

午後のおやつが終わると、園長がきりん組に来た。

「お疲れさま。五日間、どうだった？」

「すげー大変だった」

「あら」と、園長はおかしそうに笑って、それからゆっくりうなずいた。

「子どもたちにちゃんと向き合ってくれて、ありがとう」

べつに、と風汰が意味もなくからだを動かすと、頭の上で結ゆわいた前髪がびよこびよこ揺ゆれた。

「みんなすげーって思った」

「そう」

「うん。すげー」

「そうね、しおん君も」

風汰はこくんとうなずいて、「うそつきだけどね」とつぶやいた。

あいつは、しおん君はうそつきだ。お母さんが好きで、笑った顔が見たくって、愛されたくて、嫌われたくなくて、困らせたくなくて、そばにいてほしくて。

だから、笑ってる。寂さびしくても、悲しくても、好きなあそびができなくても、平気だよって笑っている。

苦しいほど素直すなおで、正直で、うそつきだ。

⑦ だけど、ううん、だからそのうそは、誰かがちゃんと見つけてあげなきゃいけない。

「ふーたーくん！」

園庭から子どもたちの声が聞こえる。泥んこの中で、早く早くと手を振っている。風汰は手を振り返して園庭に出た。

青空に向かって大きく伸びをした。

パコン！

「いてっ」

尻しりに手をあてると、甲かんだか高い声が背中中でわいた。振り返ると、新聞紙を丸めて作った刀を振り回しながら三つの小さな背中が、クスの向こうにひよいと消えた。

——エンジェル保育園

屋根の上にある看板に目をやって、苦笑した。

ウサギ小屋の前へ行くと、しおん君がまぶしそうに風汰を見上げた。

土曜の夜とはまったく違う。あのときのことなんて忘れてしまったように笑っている。

しおん君はパツと立ち上がると、「あげる」と、クローバーを差し出した。四つ葉じゃなくて、普通ふつうの三つ葉のクローバー。風汰の手に、しおん君がクローバーをのせた。

やっぱり小さいな。小さいけど、強い。

しおん君は強い子だ。だけど、本当はもつともつと弱くていい。四歳じゃん。たった四つ。びーびー泣いて、わがまま言つて、甘あまえていい。それで、ちゃんと守られて。

「サンキュ」

オレはなんにもしてやれない。なにかしてやれるほど、大人じゃない。なにが正しくて、なにをすることがこいつのためになるのかもわからない。守ってやる力なんてない。

だいたいオレ、アホだし。

でも、いまこの瞬間にしていられることだったらわかる。

いまだできることは、笑って、しおん君が握ってきた小さな手を、しっかりと握り返す。それだけだ。

風汰は、しおん君の手を握り、それからぱっと抱き上げて、「ヒコーキ！」と、ぐるりと二回まわった。

しおん君が、きゃあきゃあ声を立てる。

かるい。かるくて小さい。

この小さいからだで背負ってるんだ。いっぱいいっぱい、小さい背中で背負ってる。

「びゅーん！　ちゃくりーく」

地面に降ろすと、しおん君は黒目の大きな瞳^{ひとみ}でまっすぐに風汰を見た。

「しおん、ふうたくんだいすき！」

「オレも」

オレもしおん君のこと大好きだ。言葉にしなきゃダメなのに、これ以上声が出なかった。

言葉にしたら、泣いてしまいそうだから。

風汰はもう一度、さつきより高く、大きく、しおん君を青空に向かって抱き上げた。

(いとうみく『天使のにもつ』より)

問1 〓線部1～15のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 〓線部①「オレは……。」「(4ページ)とありますが、この言葉に続く風汰の思いを記しなさい。解答する際は、風汰の思いが記されている箇所かしよを探し、三十字以内でまとめて答えること。

問3 〓線部②「胃袋と心は比例するんだ」(5ページ)とありますが、どういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 食欲と気力は密接に関係しているため、気力が弱つているときは食欲がわからないということ。

イ 食べる量に応じて、度量も大きくなり、より良い考えも浮かびやすくなるということ。

ウ 空腹だと悪い方向に考えがちなので、前向きに考えるには腹を満たすことが重要だということ。

エ 物事をきちんと片付けようとするならば、まずは腹ごしらえをしてから始めろということ。

オ 自己肯定感こうていを高めるためには、何よりも食欲が満たされることが不可欠だということ。

問4 空欄 A (6ページ)・ D (17ページ)に共通して当てはまる漢字一字を書きなさい。

問5 ～～線部B「おせっかいな人」(7ページ) ・ ～～線部C「目を凝らしている」(8ページ)とありますが、この言葉の本文
中の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

B 「おせっかいな人」(7ページ)

- ア □うるさくて細かい人
イ 無駄遣い^{むだづかい}を許さない人
ウ 人のうわさが好きな人
エ 曲がったことが許せない人
オ 何かと世話を焼きたがる人

C 「目を凝らしている」(8ページ)

- ア じつと見ている
イ 疑わしそ^うに見ている
ウ 遠くまで眺め^{なが}めている
エ 様子をうかがっている
オ ちらちらのぞいている

問6 —線部③「あたしたちの なの」(10ページ)とありますが、

ら一つ選び、記号で答えなさい。

に当てはまる最も適切な言葉を、次の中か

- ア 仕事 イ 願望 ウ 権利 エ 義務 オ 信念

問7 — 線部④「大丈夫なんだ。きつときつと、大丈夫だ」(12ページ)とありますが、このときの風汰の心情を八十字以内で説明しなさい。

問8 — 線部⑤「あそばせてあげたいんだよね、しおん君にもああやって、思いっきり泥んこになって」(13ページ)とありますが、林田はしおん君にどうなって欲しいと思つていますか。四十字以内で説明しなさい。

問9 — 線部⑥「布団の上についてのいいの? いけないの?」(16ページ)とありますが、お母さんの言葉について説明したものと最も適切なものを、この傍線部の前後のお母さんの振る舞いを踏まえて次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 布団の上にあることの是非を疑問文としてしおん君に投げかけているように見えて、普段しおん君の面倒を見ていないことをごまかそうとしている。

イ 布団の上にあることの是非を疑問文としてしおん君に投げかけているように見えるが、実際は自分の思い通りにしおん君を動かそうとしている。

ウ 布団の上にあることの是非を疑問文としてしおん君に投げかけることで、しおん君がその不適切さに自分で気づけるようにうながしている。

エ 布団の上にあることの是非を疑問文としてしおん君に投げかけることによって、わがままでだらしないしおん君を礼儀正しい子に育てようとしている。

オ 布団の上にあることの是非を疑問文としてしおん君に投げかけることで、厳しくも愛情深くしおん君を育てようとしていることを周囲に示そうとしている。

問10 —線部⑦「だけど、ううん、だからそのうそは、誰かがちゃんと見つけてあげなきゃいけない」(18ページ)とありますが、どういふことですか。本文に即して九十字以内で具体的に言い換えなさい。

問11 —線部⑧「いまできることは、笑って、しおん君が握ってきた小さな手を、しっかりと握り返す。それだけだ。」(20ページ)とありますが、この時の風汰のしおん君に対する思いを、「それだけだ」という表現に着目しながら六十字以内でまとめなさい。

問12 ……線部などから読み取れる、それぞれの登場人物を説明したものととして、正しいものには○、間違っているものには×をつけなさい。

ア 「ハヤシダだつて言つてんでしょうがつ」(9ページ) などとあるように、きりん組担任の林田は上下関係に厳しく規律を重んじる性格である。

イ 「こつから先は関係ねーもん」(10ページ) などとあるように、まーくんセンパイは好奇心が強い割に面倒になるとすぐに投げ出してしまふ飽きっぽい人物である。

ウ 「少しはにかんだ笑顔をあいりちゃんに向けて」(11ページ) などとあるように、普段しおん君は保育園では控えめで恥ずかしそうにしている。

エ 「つて、なんでオレ、こんなに早くに来てんだよ」(14ページ) などとあるように、風汰は他人事のようにとらえていたことに対して、徐々に自分から主体的に関わるようになっていく。

オ 「はだしのまま玄関から飛び出す」(17ページ) などとあるように、風汰は後先を考えないで、衝動的に行動することがある。

カ 「ヒールを鳴らして歩いていく」(17ページ) などとあるように、お母さんは仕事が忙しく効率を優先するあまりしおん君と向き合うゆとりがない。

問13 国語の授業で、「小説を読む楽しみ」について、本文を題材に話し合いをしました。

先生…小説を読む時は、「くり返し出てくるもの」や「ポイントだと思われる単語」に着目して、その意味を考えてみると深く作品を味わうことができます。例えば、本文の中では、「天使」がキーワードとなっています。保育園の名前は「エンジェル保育園」ですし、そこにいるしおん君に日差しが当たると「天使のような輪」ができたと書いてありますよね。その意味では「子ども＝天使」という関係性を読み取れると思います。では、君たちも、一人ひとつ、気がついたことを発表してください。

Aさん…この物語には「捨て犬のチビと風汰」「しおん君と風汰」という二つの関係性がありますが、作者は意図的にこの二つの関係性を対比させていると思います。

Bさん…しおん君の布団のマークがひまわりであるのは、そっけない態度をとられてもお母さんを慕^{した}って笑顔を向けるしおん君の存在自体をあらわしていると思います。

Cさん…他者との関係が薄く住人が互いに無関心であるマンションと、住人同士のつながりが生きている団地を対照的に描^{えが}くことで、しおん君と風汰の境遇^{きようぐう}を効果的に表していると思います。

Dさん…しおん君が風汰にあげたクローバーは、幸運を表す四つ葉ではなくありふれた三つ葉ですが、それはしおん君がごく当たり前のことにも価値を感じているということを暗示していると思います。

Eさん…最後の場面で風汰がしおん君を抱き上げるのは、しおん君が背負った「天使のにもつ」を肩代わりしてあげようと堅^{かた}く決意したことを示していると思います。

問題 五人の生徒の意見の中で、本文に対する解釈^{かいしやく}として適当でないと考えられるものを一つ選び、A～Eの記号で答えなさい。

注意：「、」「。」「」も一字に数えます。

受 験 番 号

語 玉

問
1

11	6	1
----	---	---

7

8

9

10

12

13

14

15

1

2

3

4

5

問
2

オ
レ
は

問
3

問
4

問
5

C

問
6

問
7

問
8

問
9

問
10

問
11

問
12

問
13

ア

イ

ウ

工

才

力

さん